



大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 4

Q L P H R L I G H T

さとう
Satou





アルラウネ

物静かな薬草幼女。
マンドレイクに比べると
寒いのは苦手……

マンドレイク

活発な薬草幼女。
寒くても元気に
外で遊ぶ。

ギーナ

マーメイド族の女性。
細かいことは
気にしないタイプ。

シルメリア

銀猫族のリーダー的
存在。アシュトを主人
として傍に仕える。

ウッド

アシュトの魔法で
生み出された植物人。
アシュトが大好き!

アシュト

本作の主人公。
魔法適性が「植物」だった
ために家を追放され、
魔境オーベルシュタインの
領主となる。

ミュディ

優しくて家庭的な
アシュトの幼馴染。
魔法適性は「爆破」。

CHARACTERS
主な登場人物

シェリー

アシュトの妹。
「冰姫」の異名を持つ、
元・王国最強の
魔女。

エルミナ

希少種族ハイエルフの
美少女。こう見えて
大のお酒好き。

第一章 ハイエルフの里へ

俺の名前はアシュト。ビッグバロッグ王国の名門貴族、エストレイヤ家の次男……だつた。今は除籍じょせきされて貴族ではなくなつたけど、未開の地オーベルシユタインに住む希少種族きしょうしゆたちを集めて（というか、勝手に集まつた）みんな仲良く暮らしている。

最近の出来事で大変だつたのは、ドラゴンロード王国のお姫様であるローレライとクララベルの父、つまり国王のガーランド様が俺と戦うために村を訪れたことかな。あと、ワーウルフ族という人と狼の姿を持つ種族を伝染病から救つたり、ディアボロス族の長ルシファードと友人になつたり……いろいろあつたなあ。

そんな数々の事件を乗り越え、俺にも弟子だいしができる。

ワーウルフ族の少年フレキくん。まさか俺が師匠ししゅうになるとは……ははは。

住人が続々と増え、ここも村らしくなつた。

村の名前も「緑龍りょくりゆうの村」に決まり、ようやく箔はくが付いたような気がする。

とはいえ、何かが劇的に変わるわけじゃない。住人たちはいつもと同じ仕事をしている。

最近は、ガーランド様が連れてきた龍騎士たちが、村とその周囲の警護けいごをするように

なつた。

宿舎と龍厩舎の建設も急ピッチで進められている。ドラゴンたちのエサはデーモンオーラのバルギルドさんたちが狩り、生肉をそのままモグモグ食べさせていた。

不思議なことに、飼い主にしか懷かないはずのドラゴンは、サラマンダー族によく懷いた。これには龍騎士も驚き、サラマンダーたちの願いもあって世話を任せることにしたそうだ。

その間、龍騎士たちは訓練を行つてゐる。

住人たちともすぐに打ち解け、何人かの龍騎士はハイエルフの女性陣といい雰囲気になつてるとか。まあ、恋愛は個々の自由だよね。

さて、俺も大事な用事を済ませなくては。

用事とはもちろん……折れた杖の代わりをなんとかすることだ。

シエラ様からもつた材料で、ハイエルフの長であるジーゲベッグさんに依頼する。

前もつて手紙を送つたら、いつでも来てくれとのこと。

ディアボロス族やハイエルフは杖がなくても魔法を使えるが、人間はそうはいかない。

自分に合つたものを使わないと、思った通りの魔法は使えない。そのため、杖職人に専用の杖を仕立ててもらうのが普通だ。まさかジーゲベッグさんが職人だとは思わなかつたけどな。

というわけで、久しぶりにハイエルフの里へ向かうことにした。



ハイエルフの里へ向かうメンバーは、俺、ハイエルフのエルミナ、フェンリルのシロ、植木人のウッド、フレキくん、積荷の荷下ろしをするハイエルフ数名とサラマンダー族數名だ。

シロは久しぶりに兄妹に会わせてやりたいし、フレキくんはフェンリルを神聖視しているから、シロの親に会わせて驚かせたい。ウッドは友達として同行し、ジーゲベッグさんの孫のエルミナは向こうが会いたいと言つていたので一緒に行くことになった。

「センティ、よろしくな」

『お任せを!!』

「……なあお前、なんかまた伸びてないか?」
『メシが美味いと身体が伸びるみたいやで!!』

大ムカデのセンティの身体が、また伸びていた。

身体に括り付けられる箱が最初は十五箱くらいだったのに、今や倍の三十箱取り付けている。

伸びすぎじゃないだろうか……まさか成長期？

すると、隣にいたエルミナが言う。

「アシュト、里にはどれくらい滞在するの？」

「ん……杖ができるまでかな。つまり未定だ」

「そつか。じゃあお酒をいっぱい持つていかないとね」

セントイに括り付けた箱には、お土産の酒がいっぱい入っている。

几帳面なハイエルフのメージュと、徹底した農作物管理をするディアボロス族の文官、ディアーナのおかげで、加工品の生産量がアップしたのだ。ワインを仕込むためのブドウの量を均一にしたので、今や一切の無駄がない。

というかエルミナ……今までの管理が杜撰すぎだ。管理者を代えるだけでこうも変わることは。

「……何よその目は」

「いや、別に。それより準備はできたのか？」

「私はオッケーよ」

そこにフレキくんとウッド、シロが来た。

「お待たせしました師匠!! お遅れて申し訳ありません!!」

『アシュト、アシュト!!』

『きゃんきゃんっ!!』

よし、これでハイエルフの里へ行くメンバーは揃つたな。

荷物の積み込みが終わり、いつもセントイの護衛をしているデーモンオーガ、ディアムドさんも来た。

「ふむ、村長が同行するのか……これは気合いを入れねばな

」「い、いえ、いつも通りでお願ひします」

ディアムドさん、笑顔が怖い。

すると、彼はなぜか俺に近付いて小声で言う。

「村長、例の件だが……やはり駄目だろうか」

「……駄目です。というか今は魔法が使えませんし」

「ならば、杖の修理が終わつたら、試し撃ちにでも

「駄目です」

「もう……」

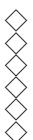
実は、ディアムドさんだけじゃなく、バルギルドさんも同じお願いをしてくる。

内容はなんと……『ミストルティン・ヨルムガンド』を出してほしいというのだ。

なんでも、ガーランド王との戦いを見て、どうしても戦つてみたくなつたのだとか。

杖が壊れる原因になつた魔法だから、杖が直つても正直使いたくない。というかあれは

禁忌の魔法だし、よほどのことがないと使うつもりはない。
とまあ、そんな感じで出発です。



相^{あいか}麦^{わら}らず、センティの乗り心^{こころ}地^ぢは最悪^{さいわ}だつた。
う、げええ……きぼちわるい』

「わたしも……」

ハイエルフの里に到着した俺とエルミナは、ぐにやぐにやになつた。

「ボクは平氣でしたけど……大丈夫ですか、師匠?」

『アシュト、アシュト、ハイキ? ハイキ?』

『きゃんきゃんつ!!』

ウッドやシロが酔うとは思わなかつたけど、フレキくんが乗り物酔いしなかつたのは意外だ。

とにかく……ようやくハイエルフの里に到着した。

「村長、荷の積み下ろしがあるからオレはここで手伝いをする。それから一度村に戻つて、また来る。手土産はこちらに置いておこう」

「あ、ありがとうございます。ディアムドさん」

ちなみに手土産というのは、道中に現れた巨大トカゲだ。

普段は大剣を使って狩るんだけど……今回のディアムドさん、素手で殴り殺しちやつたよ。どうも、ガーランド王とヨルムンガンドの戦いを見てから、デーモンオーガ一家がやる気になつてるんだよなあ。

「じゃ、俺たちはジーグベツグさんに挨拶^{あいさつ}に行くか。エルミナ、大丈夫か?』

「な、なんとか……」

「ハイエルフの長かあ……あの本の作者に会うの、楽しみだなあ」

フレキくんがそんなことを言つた。

フレキくんは、図書館に所蔵^{しょぞう}されている数々の本を書いたジーグベツグさんに挨拶したいのだと。まあフェンリルに会うのがメインらしいけどな。

ジーグベツグさんには俺も久しぶりだ……今はどんな物語を書いているのかな。

『きゃんきゃんつ!!』

『アシュト、アシュト、アソビタイ、アソビタイ!!』

「ちょっと待つてろよ。挨拶したらフェンリルに会う許可をもらうから」

ハイエルフの里は、以前来た時とまつたく変わつていなかつた。

「そりや、変わるものないでしょ。というか千年、二千年ぱっちりでも変わらないし」「そ、そろか？」

感想をエルミナに伝えたら、半眼で言われた。

さて、里のハイエルフたちに挨拶しながら、ジーグベッグさんの家に向かう。すぐに到着し、エルミナを先頭に中に入った。

「ただいま、おじいちゃん」

「失礼します」

「おおエルミナ、アシユート殿。どの遠路遙々えんろはるばる苦労様です」

そう言つて迎えてくれたのは、メガネをかけたハイエルフの長老、ジーグベッグさんだ。長い机に何枚もの羊皮紙ようひしを積んでいる。どうやら執筆中のようだ。

「お久しぶりです、ジーグベッグさん」

「お久しぶりです、アシユート殿。本日は杖の件ですか？」

「はい。シエラ様から、ジーグベッグさんは杖作りの達人だとうかがつたので」「ほつほつほ。いやあ、四十万年ほど前に杖作りにハマりましてな……十万年ほどのめり込んでしまいました」

「そ、そうですか……」

ギヤグみたいな数字だが、百万歳を超えるジーグベッグさんが言うなら本当なんだろう。

「とりあえず、シエラ様からもらった材料を渡す。手紙にも書きましたが……」

「ええ、ユグドラシルの枝ですか？ アシユート殿が言うのであれば、フエンリル様も文句は言わないでしよう。どうぞ持つていってください」

「ありがとうございます。では、さつそく枝をもらいに行きます」

ここで、フレキくんがピクツと反応した。

フエンリルに会えるのを嬉しいと思いつつ、緊張きんぢょうしているのだろう。

「エルミナ、アシユート殿を案内して差し上げなさい」

「はーい。それよりおじいちゃん、今日の夜は宴会だからね!! おいしいお肉もあるし、期待してくるから!!」

「わかつておるよ。まったく、お前という奴は……」

お肉とは、ディアムドさんが狩った巨大トカゲだろう。

杖作りにどれくらい日数が必要か知らないけど、今日は泊まりだろうな。さて、久しぶりにフエンリルに会いに行くか。

ジーグベッグさんの前を辞して、俺たちはハイエルフの里にあるユグドラシルへ向

「きさ、緊張してきました……ふえ、フエンリル様に会える日が来るなんて……」

「シロもフエンリルだけど？」

「その、シロ様を軽視してゐるわけではありませんが、文献には巨大な白狼はくろうとありましたので」

「まあ確かに……」

『きやんきやんつ!!』

シロは大きくなつたけど、まだまだ子犬サイズだ。

ユグドラシルにいた親フエンリルは、全長十メートル以上あつたしな。

「フエンリル元気かなあ？」

エルミナはご機嫌きげんだ。まあこいつは夜の宴会が楽しみなのかもしれないが。

ユグドラシルが見えてきたところで、前から白い子狼が走つてきた。

『きやんきやんつ!!』

『きやいーんつ!!』

『きやうううんつ!!』

シロが飛び出し、前から来た子狼にタックルする。そして地面じめんをゴロゴロ転がり、甘え

るよう互いの顔をベロベロ舐めた……やつてきたのはシロの兄弟たちだ。

シロの兄弟も大きさはそれほど変わらない。成体まで成長するのには時間がかかるのだ

ろう。

そして、ユグドラシルに到着……根元には、大きな白い狼が横になつていて。日光浴ひこうよくで

もしてゐるのか、目を閉じて気持ちよさそうにしている。

『久しいな、アシュトよ』

こちらに気付いたのか、大狼——フエンリルが目を開け、話しかけてきた。フエンリル

は人間の言葉を喋しゃべれるのだ。

『久しぶり。元気にしてたか?』

『ふ……歳とを取ると、そう簡単には変わらんよ……おお、久しいな娘よ』

『きやんきやんつ!!』

『エルミナ、お前も久しいな』

『久しぶり、フエンリル』

シロは、尻尾を振りながら母親に駆け寄つて甘えた。

フエンリルも、シロの毛づくろいをして、フエンリルは言つた。

『して、なんの用だアシュト。娘を会わせに来ただけではあるまい』

『ああ、実はお願いがあつて來たんだ』

『ほう……申してみよ』

俺は杖の話をして、材料としてユグドラシルの枝が欲しいことを伝えた。

『なんだ、そんなことか。枝ならいくらでも持つていけ』

『え、いいのか?』

『かまわん。若い頃のジーヴベッグなど、毎日のように木に登っては杖を折つて、持つて帰つていたぞ』

『え、おじいちゃん、そんなことしてたの?』

目を丸くするエルミナ。

『ああ。若い頃の奴は杖作りに没頭しててな……ハイエルフは杖などなくとも魔法が使えるのに、奇妙なことをする奴だと笑つたわ。ジーヴベッグの作った杖は、人間の国に流れたな』

『そ、そ、うなんだ……』

あの爺さん、多芸すぎるよ。

フエンリルが長い尻尾を軽く振ると、ちょうどいい長さの枝がポトッと落ちてきた。力マイタチでも起こしたのだろうか。

『杖に使うのなら、それでいいだろ。持つていけ』

『ありがとう。あ、それと、お前に挨拶したいって子が……フレキくん?』

「…………」

「…………」

フレキくんを見たら、緊張しすぎて立つたまま気絶していた。
揺さぶつて起こしてやる。

「は、はじめまして!! ポクはワーウルフ族のフレキと申します!!」

気絶から回復したフレキくんは、人狼の姿になつて跪く。

『人狼か。こうして見るのは随分と久しぶりだ』

『おお、お会いできて光榮ですっ!!』

『そうか。確かワーウルフ族は、我々フエンリルを慕つてくれてているのだつたな』

『は、はひつ』

『ふ、そう固くなるな、若き人狼よ。お前のことはジーヴベッグを通して聞いていた。アシュトのもとで学んでいるそうだな。しっかりと励めよ』

『は、は、はいいいいつ!!』

フレキくん、感極まりすぎて泣いちゃつたよ。

まあ神様から『頑張れ』なんて言われたらやる気になるよなあ。

『じゃあフエンリル、帰りにまた寄るよ。シロは……うん、久しづりに家族団欒だな』

シロは、フエンリルに甘えまくつていた。

微笑ましいので、杖が完成するまでたっぷり甘えさせてやろう。
さて、材料も揃つたしジーヴベッグさんのところへ戻るか。

第二章 緑龍ムルシエラゴの杖

「おお、ユグドラシルの枝を持つてきましたな。では作業を始めましょう」

ジーグベツグさんは執筆を中断し、杖作りを始めた。

意外にも、道具は少ない。俺の渡した材料と小さな手拭てぬぐいだけだ。

「ふむ、素晴らしい素材ですな。ムルシエラゴ様の爪と鬚なみ、そしてユグドラシルの枝みがみが」

ジーグベツグさんは素手で枝を折り、爪と鬚を手拭いでよく磨く。

俺はたまらず質問した。

「あ、あの、道具は使わないんですか?」

「ええ。持論ですが、こういうのは全て人の手で行うのがいいのですよ」

「へ、へえ……」

まあ、職人のやり方に口を挟むのはやめた方がいいか。

すると、エルミナが言う。

「ねえアシト。時間かかるようだしさ、ちょっと一緒に来てよ」

「え、どこに?」

「フレキはフエンリルの話を聞くのに夢中だし、ウッドもフエンリルの子供たちと遊んでるし、私一人じゃ大変だから、あんたしかいないのよ」

「だから、どこに行くんだ?」

「実はさ、緑龍の村に移住したいってハイエルフたちがいっぱいいるのよね。そこでアシトに選別してもらおうと、集会所にみんな集まってるの」

「ええ? ハイエルフって、何人だよ」

「ざつと五十人。みんな女の子よ」

「……なんで俺が?」

「村長だから。ほら行くわよ」

「あつ、ちょつ」

俺はエルミナに引きずられて集会所へ向かい、ハイエルフたちの面接をする。エルミナに引きずられて集会所へ向かい、ハイエルフたちの面接をする。結果、村に十五人のハイエルフを受け入れることになった。

人手が欲しかったからいいけど、こういうのはもう勘弁かんべんしてほしい。

そういうするうちに夜になり、歓迎会おもてなしという名の宴会が始まった。

ハイエルフ料理と酒が振る舞われ、踊り子たちによる踊りや、男たちの余興よきょうなど、大い

に盛り上がった。

ハイエルフ料理も美味しい。

山の幸がメインだが、見慣れないものも多くある。

中でも驚いたのは、この辺では見ない魚料理だった。

俺は、隣に座るエルミナに聞く。

「この魚、美味しいな」

「でしょ？ 川魚と違つて海のお魚は大きいものばかりだからね。食べごたえもあるでしょ！」

「海？ これ、海の魚なのか？」

すると、酔つてご機嫌なジーベッグさんが話に加わる。

「そういえば、アシュト殿の村では海の幸を取り扱つてませんな」

「まあ、そうですね」

「よろしければ『マーメイド族』を紹介しましようかな？ 彼らと海の幸の取引を行う

というのはいかがでしょうか」

海の幸か……うん、欲しいな。

ジーベッグさんにお願ひして、海までの地図を書いてもらう。想像していたより、こ

こが海に近いことに驚いた。

「キングセンティピード……センティの足なら往復で一日ほどでしよう。それに、優秀な護衛もいらっしゃる」

「これはこれは、ありがとうございます」

「いえいえ。こちらからマーメイド族に話を通しておきましょう。時間がある時にでも訪ねてもらえれば」

「はい、わかりました」

その後、宴会は夜遅くまで続いた。

フレキくんは酒を飲んでグロッキー、そのまま集会所の別室に運ばれていった。

ウッドはフエンリルの家族と一緒にいるようだ。どうもフエンリルに気に入られたらしく、子狼たちと一緒に遊んでいる。

エルミナは……あれ、いつの間にかいない。

そして、宴会が終わって休むことに。

俺はジーベッグさんの家に泊まることになつた。

使用者らしきハイエルフに、二階の一番奥の部屋を使うように言われ、階段を上がつてドアを開けた。

「はあ……うええ。飲みすぎたわ」

「え？」

ドアを開けると、エルミナがいた……す、素っ裸^{すばだか}で。

「……え、エルミナ?」

「あ、アシスト……なな、なんで」

「い、いや、俺はその、この部屋を使えって」

エルミナはシャツで体を隠^{かく}し、赤い顔で俺を睨^{にら}む。

「ここは私の部屋よバカああああ―――っ!!」

「すみませんでしたっ!!」

俺は慌てて部屋を出た。



「…………」

「だから、本当にここを使えって言われたんだよ!!」

「…………まあ、信じてあげる。どうせおじいちゃんのイタズラだらうし」

エルミナが服を着たので、改めて部屋に入り謝罪^{しゃざい}した。

エルミナは頬を膨らませていたが、なんとか許してもらつた。

ジーブベッグさんのイタズラはともかく、結局俺はどこに泊まればいいんだ。

「なあ、俺の部屋は?」

「この家の二階は物置と私の部屋しかないわよ。おじいちゃんは一階だし」

「え……じゃあどうすんだよ」

「……仕方ないわね。特別にここで寝かせてあげてもいいわ」

「え」

「ただし、変なことしたら……」

「しないつつの!!」

というわけで、エルミナの部屋に泊めてもらうことになつた。

さつきの手前恥ずかしかつたが……忘れよう。

エルミナの部屋は、ものが少ない部屋だった。

切り株みたいなテーブルに、刺繡^{ししゅう}が施されたカーペット。あとはベッドと机と椅子、ク

「わ、悪い」

怒られてしまつた……とりあえず、話題を変えよう。

「あのさ、マーメイド族つてなんだ?」

「マーメイド族は海に住んでる種族よ。下半身が魚で、海底に町を作つてゐるの」

「へえ……そこで魚を獲つてゐるのか？」
 「ええ。マーメイド族は、漁業を生業としてゐるわ。ハイエルフの里で取れた果物と交換してゐるのよ」

「果物つて……海の中で食べるのか？」

「よくわかんないけど、マーメイド族は陸上でも活動できるの。マーメイド族にしか使えない魔法で、ヒレを足に変えることができるらしいわ」

「へえ……でも、海の幸は食べてみたいな」

ジーヴベッグさんが話をつけてくれるみたいだし、時間ができたら訪ねてみるか。行けるかどうかわからないけど、海底の町にも興味がある。

それに海といえば、神話七龍の一体、『海龍アマツミカボシ』が生み出したものだ。御利益があるかもね。

「海があ～♪ アシュトくん、ミズギを準備しなきやね!!」
 「ミズギ？ ミズギつてうおおおおつ!!」

「きやああああつ!! いつの間にいいつ!!」

「はあい♪ アシュトくん、エルミナちゃん♪」

いつの間にか、俺やエルミナの座るテーブルの輪に、シエラ様が交ざつていた。
 神出鬼没には慣れたが、今回はマジでビビつた。まさか村の外にまで現れるとは。

シエラ様は俺たちの反応など気にせず、話を続ける。

「マーメイド族があ～、アシュトくんも海に乗り出したのねえ」

「いや、まだ行かないんですけど」

「あそこに行くならミズギは必須よ。海底の町の入口にミズギのお店があるから、ちゃんと準備すること!!」

「は、はあ……」

「それと、行く時は必ず女の子を連れていくこと!! ミュディちゃんとシェリーちゃん、ローレライちゃんとクララベルちゃん、もちろんエルミナちゃんも一緒にね♪」

「え、いや……まあ、わかりました」

「私も行くの？ よくわかんないけど……」

「ふふふつ♪ もちろん、私も行くからネ♪」

よくわからんが、女の子を連れていかないとダメらしい。

エルミナと顔を合わせて首を傾げ、シエラ様になぜなのか聞こうとした。

「……いねえし」

目を離したほんの一瞬で、シエラ様は消えていた。



翌日。

ジーグベッグさんの家の使用人が作った朝食を食べ、杖作りの続きを眺めた。

フレキくんは朝の挨拶をしてすぐにフエンリルのもとへ。ウッドはフエンリルのところへ行つたきり見てない。

エルミナは、里の果樹園に行つたようだ。今日は手伝いをするらしい。

俺は杖作りが気になつたので、ジーグベッグさんのところで見学していた。

「ふむ……こんなもんかの。ほれ、どうぞ」

「おお……」

昨日はほとんど完成していたのか、今日は最終調整だけのようだ。

ユグドラシルの枝を本体とし、魔力の通り道である芯にはシエラ様の髪を用い、魔力を增幅させる核は、杖の柄尻に埋め込まれていてる。

長さは、以前の杖より少し長いな……でもしつくりくる。

軽く振ると、手によく馴染んだ。

「いいですね、最高にいいです」

「ふふふ。素材が最高級ですからな。久しぶりに杖を作りましたが、まだまだ『おとろ装えておりません』

「すごいです、ありがとうございます!!」

「お役に立てて何よりです。さて、ワシは執筆に戻るとします。魔法の試し撃ちは裏で行うといでしよう。不具合はないと思いますが、何かあつたら言つていただければ」

「はい、わかりました」

家の裏に向かうと、広場になつていた。

とりあえず、簡単な魔法を使うか。

「よし、この雑草でいいや……『成長促進』

チビな雑草に向けて『成長促進』を使用すると……

「つとと、ストップストップ!!」

あつという間に、庭が雑草だらけになつてしまつた。

すごい、前の杖より魔力がスムーズに流れしていく。しかも消費魔力は前よりさらに少ない。

今までは一の魔力で十の効果を発揮していたが、この杖なら一の魔力で五十の効果を発揮できるだろう。

「これもシエラ様の素材とジーグベッグさんの腕のおかげか……ありがとうございます」

杖を抱き、俺はその場で頭を下げた。

すると、ジーグベッグさんの家の使用人たちが俺を見ているのに気付いた。

ほんのりとジト目……あ、庭を荒らしたからか。
「も、申し訳ありません」
この日は、魔法を使わずに草むしりをした。



翌日。

用事が済んだので、村へ帰ることにした。セントイが到着し、護衛にはバルギルドさんと息子のシンハくんがいる。見送りには、たくさんのハイエルフたちが来た。

セントイに乗つて帰るのはエルミナと新しい住人のハイエルフたち、フレキくん、そして、『きやんきやんつ!!』

『アシュト、アシュト!!』

シロとウッドだ。

後ろには、フェンリルとシロの兄弟たちがいる。俺はしゃがみ、シロを抱きしめてワシリワシ撫^なでる。すると、シロの兄弟たちが飛びかかってきた。

「うわっ?!」
『きやううーーーん』
『くううん』

『撫でてやつてくれ。どうもアシュトのことを聞いたらしくてな、羨ましがつている』

「そ、そなのか? よしよし」

シロの兄弟たちもふわふわで可愛い。

ひとしきり撫^なると、ようやく離れてくれた。

「ジーヴベッグさん、杖をありがとうございました」
「いやいや、お役に立ててよかったです」

俺の新しい『緑龍の杖』。大事に使わせてもらいます。

全員セントイに乗り込み、ハイエルフたちに見送られて里をあとにした。

「いやあー、素晴らしい経験ができました!! アセナやワーウルフ族の村のみんなにいい土産^{トモダチ}話ができましたよ!!」

「そ、そなか……うつぶ」

俺は、早くも酔つていた。

セントイの背中に慣れる日は、まだまだ先みたいだ。

第三章 愛の言葉をきみに

新しい杖を入れたからといって、生活が変わるわけじゃない。

ハイエルフの里から帰つて数日。新しい住民用の住居を作るために、エルダードワーフ

たちが作業をしている。

また、俺の薬院も並行して建設中だ。

フレキくんがワーウルフ族の村に薬院を建てたと聞いて、ちょっと羨ましくなった俺は、エルダードワーフのアウグストさんに相談した。前々から構想はあったとのことで、喜んで着工してくれた。

俺の意見が入った薬院。

診察室は広く、実験室や薬品庫を完備し、一階には俺の新しい部屋を作る。

なぜか図面には幼馴染のミュディと妹のシェリー、ローレライとクララベルの部屋もあつたが……どこかで見えない力が働いてるような気がして、深くツッコめなかつた。

建築予定場所は、現在の家のぼば隣。

今との家と新しい家を渡り廊下で繋ぎ、今のは銀猫族のシルメリリアさんとミュアちゃん

ん、魔犬族のライラちゃんが住む。余った部屋は、薬草幼女のマンドレイクと、アルラウネの個室にする予定だ。

食事などは今の家のリビングで食べ、個別の部屋は新しい家に作るという感じだ。ちなみに、マンドレイクとアルラウネは個室を喜んでいた。

身体的な成長はないが、それぞれ個性が出てきた気がする。

マンドレイクは料理を習い始めたし、アルラウネはミュディから裁縫を習い、自分専用の前掛けやマンドレイクのためにエプロンなんかを作っていた。ミュアちゃんも簡単な料理なら作れるようになつたし、ライラちゃんも裁縫だけじゃなく、ドワーフから小物作りを習い、ブローチや髪留めを作つてシルメリリアさんにプレゼントしていた。

子供の成長は速い……俺も温室の世話や実験以外の趣味を探そくかな。
そんなある日の休日。久しぶりにミュディと二人きりになつた。



フレキくんの指導を終えた午後、俺は一人診察室で読書をしていた。
「アシュト、いる？」

「ん、どうしたミユディ？」

すると、左手を押さえたミユディが診察室に来た。

「あの、製糸場で指を切っちゃって……」

「見せて」

俺は読書を中断。ミユディが言い終える前に立ち上がり近付く。

手を取つて見てみると、左手の人差し指が何かで挟んだように切れていた。

「……これ、ハサミで切ったのか？」

「うん。糸を切る時にちょっとね」

「痕が残つたら大変だ。すぐに治療しよう」

「ん……ごめんね」

「謝るなよ。ほら」

ミユディを椅子に座らせ、消毒をする。

「染みるぞ」

「ん……つつ！」

「よし、あとはハイエルフの秘薬を塗つておしまい。このくらいなら明日には治つてるよ」

「うん、ありがとう」

左手の人差し指だけ緑色になつたが仕方ない。

ハイエルフの秘薬の弱点は、見栄えが悪いことだな。
「仕事は終わりか？」
「うん。みんなに帰つて休めつて言われちゃつた」
「はは、じゃあ……あ」
「……あ」
「俺とミユディは同時に声を上げた。

「そういえば二人きりだ。こんなの随分と久しぶりだ。
やっぱ、急に緊張してきた。

「あー……その、お茶でも飲むか」

「あ、わたしがやるよ」

「いいって。怪我人なんだし、ここは俺に任せろよ」

「……ん、ありがとう」

シリメリアさんは、銀猫たちの集会に参加しているからいない。
診察室にも、ティーポットやカップくらいならある。魔法で水を注ぎ、杖でティーポッ

トを軽く叩くとお湯が沸く。

「カーフィーと紅茶、どっちがいい？」
「じゃあ……紅茶で」

俺はカーフィー。デイミトリからもらった高級カーフィーが山ほどあるからな。
紅茶とカーフィーを淹れ、紅茶の方をミュディに渡した。

「ほい、熱いから気を付けて」

「うん。ありがと」

診察室のソファに移動し、ミュディと隣り合わせで座る。

カーフィーはほろ苦く上品な味わいだ。さすが高級品……

「ん……美味しいよ、アシュト」

「そうか？」はは、シルメリアさんが淹れればもと美味しいんだけどな」「ううん、アシュトが淹れてくれたから美味しいの」

「そ、そつか……」

無言でカーフィーを啜る。なんというか……そわそわしてきた。

「そういえば昔、アシュトがお家のキッチンから果物をくすねてきて、シェリーちゃんと一緒に三人で食べたことあつたよね」

「あー……そういえばそんなことあつたな。あの時はリュドガ兄さんにバレて、こつびどく叱られたよ」

「ふふ、シェリーちゃんが泣いちゃって、リュドガさんが慌てて……」

「ああ。結局リュドガ兄さんが、謝つちやつたんだよな」

「一番悪いのは俺なのにな。リュドガ兄さん……元気かなあ。

「シェリーも、昔は可愛かったのになあ」

「今もすつごく可愛いじゃない。あんなに素直で優しくて可愛い子、そうはいないと思うよ」

「うーん……俺からすると妹だし」

「ふふ、シェリーちゃんはお見合いを全部蹴って、お兄ちゃんを選んだんだよね」貴族の間では、誰がシェリーちゃんのお嬢さんになるかで決闘になりかけたなんて噂もあったしね

「マジかよ……」

「でも、シェリーちゃんはお見合いを全部蹴って、お兄ちゃんを選んだんだよね」確かに、シェリーは全てを捨ててここに来た。

「でもそれは、ミュディにも当てはまることがある」

「なあ……ミュディは家を捨てたこと、後悔していないのか？」

「うん、もちろん」

即答だった。思わずミュディの顔を見ると、真っ直ぐ俺を見ていた。

「目を逸らしてはいけない。そう思つた。

「アシュト、わたしやシェリーちゃんが全てを捨ててここに来た理由、わかる？」

そんなの、決まっている。

「わたしは……アシュートが大好きだから。一緒にいたいから。貴族の名前よりも、王国での暮らしそりも、アシュートが大好きだから、ここに来たんだよ」

「……ミユディ」

「アシュート……アシュートは？」

「……俺だつてそっだ。全部俺の勘違いで家出して……ミユディが大好きだから、ミユディと兄さんが結婚するところなんか見たくなくて……全て捨ててここに来た。大好きなミユディを忘れて、イチから始めようとして……でも、ダメだつた。ミユディの顔がずっと残つてて、忘れられなかつた。ミユディだけじゃない。シェリーが大怪我して村に運び込まれた時は、本当に震えた……」

「……」

俺は、言うべきことを言つていいない。だから今、しつかり言おう。

「ごめんミユディ。俺の勘違いで大変な思いをさせて……危険な目にも遭わせた」

「いいの、本当に後悔していない。それに、こんな素敵なかつた村で一緒に暮らせて、今とつても幸せなの」

「俺もだ。ミユディやシェリーと一緒に暮らせて、とつても幸せだ」

「ミユディはそつと、俺の左手に自分の手を重ねた。



俺とミュディの距離はとても近い。
心臓が、バカみたいに高鳴つていて。

今なら……ううん、今言わなくては!!

「ミュディ、愛してる。俺と……俺と結婚してください!!」

「はい、わたしもアシエトを愛しています……結婚してください」
細くしなやかなミュディの手は、とても熱かつた。



ミュディにプロポーズした夜……

俺は、家にたくさんの人を招いて食事会を開いた。

まず、ハイエルフトリオのエルミナ、メージュ、ルネア。エルダードワーフのアウグストさんとフローズキーさん。サラマンダー族のグラッドさん。ハイピクシーのフィルにベルことベルメリーラ。ブラックモール族のポンタさん一家。デーモンオーガ二家。ローレライとクララベルだ。

人数が人数だからけつこう手狭だ。

ちなみに、俺は家に住人を招いてよく食事会をする。今回はこのメンバーだが、もちろん

ん別の種族や住人も呼ぶ。村内の交流はいっぱいしないとね。

リビングの壁際にテーブルをくつ付け、そこに料理を並べて自由に取る立食スタイルで食事をしている。

酒も入り、料理が少なくなってきたところで……

「みんな、ちょっと聞いてほしいことがあるんだ」

俺は、みんなの注目を浴びるような位置に移動し、ミュディを呼ぶ。

ミュディは照れながらも隣に立った。

「えー、実は俺、ミュディにプロポーズしました!! ミュディも受け入れてくれました。
なので俺たち、夫婦になります!!」

パリンと、グラスの割れる音がした。

落としたのは……エルミナだ。

室内がシーンとなり、全員がポカンとしている。

すると、シェリーが言つた。

「お、お兄ちゃん、ミュディにプロポーズしたの?」

「ああ、した」

「そ、そつか……おめでとう!! やつと結ばれたんだね、ミュディ」

「シェリーちゃん……」

シェリーの祝福は嬉しいけど、どこか作り物みたいな笑顔だった。

今度はローレライが前に出た。

「おめでとう、アシュト、ミュディ。これで私も名乗りを上げられるわ」

「へ？」

「アシュト、私もあなたに結婚を申し込むわ。私も……あなたを愛しています。結婚してください」

「え、ろ、ローレライ？」

「やつぱり……ふふ、こうなると思つた」

「みゅ、ミュディ？」

「ず、ずるいざるい姉さま!! わたしだってお兄ちゃん大好き!! 結婚したい!!」

「く、クララベルまで……ちょ、落ち着け二人とも」

「落ち着いてるわ。ねえミュディ」

「ええ、もちろん。アシュト、ローレライは本気だよ?」

「わ、わけわからん。

確かにローレライは可愛いし、俺も好きだけど……夫婦になるとかの好きでは……ない、わからぬ……さすがに、いきなりは無理だ。

立ち読みサンプル はここまで

「すぐに答えを出さなくていいわ。でも、私にはあなたしかいない。アシュト、あなたを愛しているわ」

「ローレライ……」

「お兄ちゃん、わたしもお兄ちゃん大好き!!」

「クララベル……」

すると、少しずつみんなの声が聞こえてきた。

「おいおい村長よ、こんなべっぴんさんの告白を断るとかねえよなあ?」

「あ、アウグストさん

「そうだよ!! オーガ族の強い雄は、何人も奥さんを娶つてゐるんだからさ、村長もたくさん奥さん娶つちやいなよ!!

「の、ノーマちゃん」

「叔父貴。これも強い男の宿命。受け入れて差し上げてくだせえ」

「グラッドさんまで……」

「村長、モテモテなんだな」

「ポンタさん……」

「うーん、みんなノリノリだ。酒も入つてゐるからか、テンションが高い。

「おいアウグスト、村長の新しい家の間取り、図面を引き直せ!! こりや母ちゃんが山ほ